

【研究ノート】

静岡県東部の近代保養地の形成について

笹原 千賀子

要旨 明治政府は、欧化政策を進める中で、保養・療養思想の普及を図る。その過程で静岡県東部には保養地（リゾート）として、政府要人を中心とする別荘が建設された。これらは避寒・避暑・温泉・海水浴という保養地の種別全てを網羅するものである。現在でも、域内の都市化した市街地には、当時の歴史を語る建築や遺構が残ることから、近代保養地という視点で周辺の景観等とともに整理する事によって、全体を近代化遺産の一つとして評価することができる。

キーワード：名勝 名所 景勝地 リゾート 保養地 保養地 観光地 別荘（註1）

1 本論のねらい

静岡県は駿河湾に面し、美しい海岸線と南アルプス、富士山、箱根山などの高山帯に囲まれた地勢を有する。

また、近世までは京と江戸を結ぶ東海道が、そして近代以降は東海道線、東海道新幹線、東名高速道路といった国の主要幹線が県の東西を貫いている。これによって、途絶えることのない人々の往来が、県内の「景勝地・名所」の情報を発信し続けてきた。

このような地理的特徴を持つ本県において、主に東海道沿いに点在する景勝地は、古代以降の芸術作品を

媒体とした間接的な評価から誕生することになる。そして、近代以降の保養・療養思想の展開によって再構成され、やがて戦後に至り観光地として多くの人が訪れるようになった。この過程で景勝地の価値は急速に変化していく（註2）。

本稿では、主に県東部において近代以降発展していく保養地の歴史を再確認し、保養地が伝統的な景勝地と離れ、別荘地やリゾートとして再構成されていく過程を追う事で、各地に点として残されている当時の文化財建造物や展望地点を、近代保養地という視点で整

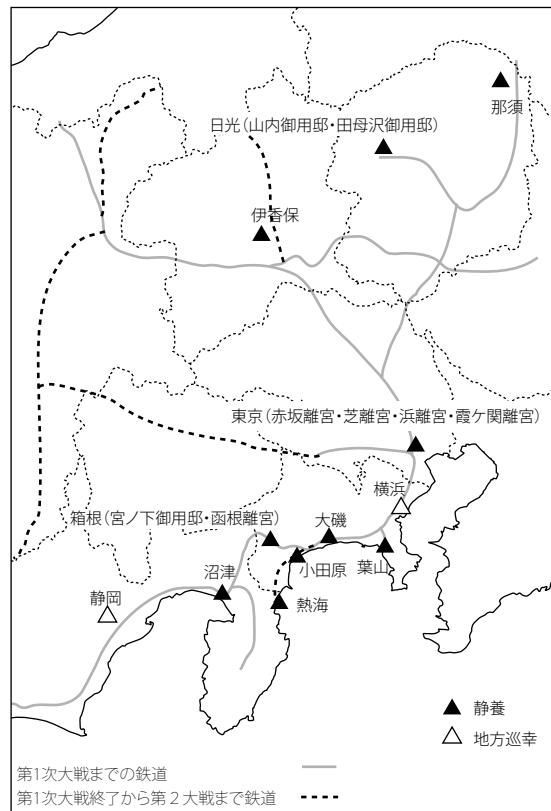


図1 天皇家別邸の分布と鉄道網

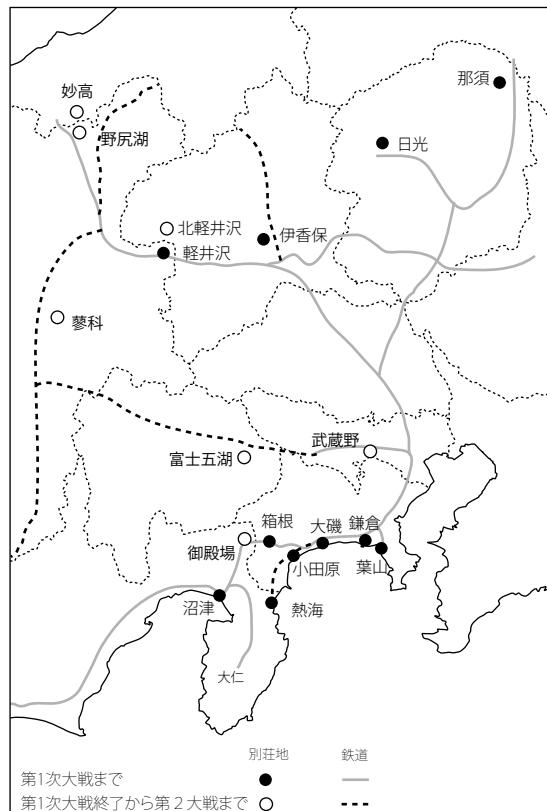


図2 別荘地の分布と鉄道網

理することを目的とする。

2 近世以前の景勝地の評価と継承

現在、我々が「景勝地・名所」として訪れる場所は、長きにわたって優れた景色が評価されてきた土地である。これらの土地は、文学作品や芸術作品の中で繰り返し語られ、描かれることで土地のイメージが定着し現在に至る。それゆえ名勝として指定され、文化財保護法によって保護の措置が図られているものも多い。

静岡県内の「景勝地・名所」についても同様で、古くは『万葉集』に収録される山部赤人の「田子の浦ゆ～」に詠われる田子ノ浦（註3）のように、繰り返し詠われ、描かれることによって例えば田子ノ浦＝富士山展望の名所というイメージが作られてきた。それは、西行の詠んだ「小夜の中山」＝恋心、在原業平の『伊勢物語』中の「宇津山（鳶の小道）」＝都落ち、においても同様で、特定の文化的教養を持った階層の東海道往来によってもたらされた情報が、枕詞のように土地のイメージとして定着し、未だその姿を目にした事もない人々の間で、芸術作品を通して「景勝地・名所」として認識された。芸術作品無くしては現在にその評価は残らなかつたものである。しかし一方で県内の古典的な「景勝地・名所」は、東海道沿いに集中するため、芸術作品が伝えてきた姿は開発によって失われ、今では作品の中にのみ往時の姿を垣間見ることができるかつての「景勝地・名所」も少なくない。

江戸時代に入ると、様相は少々変化する。それは、旅する階層の多様化から生じる旅の目的の変化と、新しい「景勝地・名所」の探求である。特に中期以降は伊勢講や富士講の流行、刊本の普及によって、多くの名所案内図や旅行本、あるいは「景勝地・名所」を舞台とした物語（註4）が刊行された。これによって、新たなイメージが土地に付加されるのと同時に、河村珉雪『百富士』に代表されるような未知の「景勝地・名所」探索（註5）も進められた。

このように近世以前「景勝地・名所」は、芸術作品の影響を受けながら伝達され、多分に観念的で誇張したものとなり、特定の「景勝地・名所」の「型」が造られ、その「型」によって場に対する憧れを醸成させることになる。しかし、その場は、ある意味その価値（芸術作品）を解する者の中で共有される情報で、非日常的な場であり、絵画や歌などの芸術作品が価値を担保したと言ってもいい。

3 近代以降の構造変化

明治維新を境に、急激な社会の構造変化が生じることになる。それは日本が国際法適用対象となることを一つの目的とした欧化政策に起因し、政治家や学識者の欧米留学や、多くの欧米人の雇用によって強力に推進された。このような中で政府高官らを中心に広がつたものの一つが転地・療養思想である。これは、景勝地に身を置くことで得られる心身の健康の獲得を目的としたもので、海水浴、温泉、避暑、避寒と一体となり、近代リゾート（保養地）開発の嚆矢となった。これを可能としたのは、西洋医学、公衆衛生学の受容や諸外国の先行事例に学ぶところも多かった。しかし、土農工商という身分制度の廃止とそれに替わる華族令の公布、太陽暦導入による週休制の施行、個人の土地所有の自由化といった、社会制度上の変化（註6）なくしては不可能であった。この構造的な変化こそが、「景勝地・名所」を個人が所有し、そこに居住することを可能としたのである。リゾートの発生である。

すでに多くの論文にあるように、初期の保養地は在日外国人の避暑活動によって日本国内に認知された。箱根、日光、草津、伊香保など伝統的な景勝地にその所在が偏っているのは、明治政府が在日外国人の行動範囲を制限していたためであり、当時日本人が捉えていた「景勝地・名所」がそのまま在日外国人の行動範囲として指定された結果でもある。

そして、更なる保養地の拡大は、天皇家の御用邸建設と、政府要人の別荘の建築から始まる。近世以前、皇室別荘は公家別荘の系譜を受け継ぎ、本邸のある京都周辺の山間部に建設されるのが特徴であったが、明治以降は山間部だけではなく、海浜部にも建設される。この背景には明治16年（1883）に伊東方成（玄白）、岩佐純ら皇室侍医連署による明治天皇、皇室子女の転地療養を勧める建議書や、ドイツ人医師エルヴィン・ベルツの影響が大きいとされている。水沼淑子2000によれば、第2次世界大戦以前に設置されたことが解っている離宮・御用邸は25件で、使用目的から別邸・迎賓施設、地方巡幸用宿舎、保養施設の3つに分類することが可能である。また、これらは明治20年までは前二者が整備され、20年以降には保養施設が順次建設されていく。そして御用邸の周辺には政府要人が別荘を構え、周囲一帯にインフラが整備される。代表的な保養地・リゾートとして国によって整備されていく状況は、当時ヨーロッパの保養地として展開していたイギリス、ブライトンなどを意識したものであったと言わ

れている。

この後御用邸周辺の保養地は、より拡大するもの、大衆化と環境悪化によって消滅するもの、あるいはレジャー施設の整備、環境保護等の施策によって現代まで形を変えながら存続するものなどに分かれしていく。

4 静岡県東部の状況

日本各地に保養地が展開していた明治時代中ごろ、静岡県内にも東京に近い東部地域を中心に保養・療養

を目的とした地域開発が行われた。以下に代表的な沼津、熱海、御殿場の事例をまとめる。

(1) 沼津（西海岸）

ア 景勝地としての歴史

沼津市は伊豆半島の付根に位置する。田子の浦から狩野川河口までの海浜部には松原が広がり、「千本松原」と呼ばれている。古代東海道は浮島沼の北側を行く根方街道と、南側の駿河湾の砂堤防上を通る浦方道の2



No.	施設名	種別	設置	備考
1	大山巣邸	別荘	明治23頃	
2	三島館	旅館	明治24	元三島本陣 世古家開業 のちの沼津 ホテル海水 浴場併設
3	三輪善兵護別 荘	別荘	明治40	登録、現沼 津クラブ
4	沼津御用邸	御用邸	明治26	国名勝
5	井上馨邸	別荘	明治20頃	
6	川村純義邸	別荘	明治20頃	
7	学習院沼津遊 泳場	臨海 学校	明治44	現存
8	大木喬任邸	別荘	明治20頃	
9	黒田長成邸	別荘	明治30頃	
10	岩崎弥乃介邸	別荘	明治30頃	
11	静浦ホテル	旅館	明治未	
12	静浦保養館	保養所 (旅館)	明治24	安藤正胤開 業
13	西郷從道邸	別荘	明治20頃	
14	静浦海浜医院	病院	明治26	安藤正胤開 業
15	東京府立第一 中学校	臨海 学校	大正9	日比谷高校
16	沼津林間学校	臨海 学校	明治23頃	
17	東京府立第七 中学校	臨海 学校	昭和8	隅田川高校
18	膳桂之助邸	別荘	昭和初期	
19	岡部長景邸	別荘	昭和	
20	三井家別荘	別荘		
21	若山牧水邸	邸宅	大正15	
22	酒井孝忠邸	別荘	昭和	
23	安田屋旅館	旅館	大正7	登録

図3 沼津沿岸部の主要施設（地理院地図使用）

ルートがあったとされており、この千本松原北側を通る浦方道は、中世以降京鎌倉往還が増えるに従って、紀行文にも登場するようになる（註7）。

また、江戸時代になると『伊賀越道中双六 沼津の段』や平家物語の『六代』が歌舞伎や人形浄瑠璃で演じられ、浮世絵の画題にもなり、沼津は松原越しの富士山を展望する景勝地として広く認知されるようになっていく。江戸時代の園芸にまつわる文芸・文化の交換の場となった植松氏の庭園「帶笑園」も、温暖で景観の良い沼津を大名や知識人にアピールした。

このような伝統的な景勝地に転機が訪れたのは明治22年（1889）の東海道線の開通（新橋－静岡間）である。当時は丹那トンネルの開通前で、東海道線は御殿場を経由して運転されていたが、時刻表を見ると沼津－新橋間を最短約4時間で結んでいたことがわかる。これと前後して、千本松原の南端牛伏から静浦にかけて、大山巖、川村純義、大木喬任、西郷従道の4伯爵が別邸を構える。そして明治26年沼津御用邸が設置された頃には、周辺に海水浴場や高級旅館、別荘が次々と建設され（図3）、しばしばそこは政治の裏舞台としての役割も果たした。

沼津御用邸は、大正天皇療養施設として明治26年7月に竣工した。御用邸設置にあっては、川村純義や宮内省による気温や周辺住民感情等の綿密な調査が行われ、景観の美しさ、歴史的景勝地としてのみならず、海浜保養の適地として選定されたことが記録に残っている。沼津御用邸は海浜療養を目的とした御用邸の中では葉山とともに最初に建てられたものであり、本邸建設の後も、明治～大正時代にかけて皇孫教育のための施設として機能が変更されていく中で、規模が拡張されていった。そして、冬期の長期利用は、同時期に建てられた御用邸の中でも群を抜いている。

明治30年代に現在の国道414号線が整備されはじめると、江浦湾を挟んだ南側（内浦、長浜）にも別荘が建ち並び、我入道を挟んだ北側には旅館や財界人の別荘が建築されていった。明治41年（1912）、御用邸南側に学習院沼津遊泳場が設置され、皇室子弟の教育的な場となると、それに呼応するように周辺に東京府立中学校の臨海学校も設置された。

大正時代に入ると、第一次世界大戦後の好景気の影響を受けて新しい裕福層が生まれ、沼津千本浜から三津長浜にかけての海岸沿いには別荘、首都圏の学校・企業の臨海施設、旅館が立ち並ぶようになり、その数は80戸を超える。御用邸が立地していた楊原村の戸数

は明治22年（1889）に746戸だったものが大正5年（1916）には1337戸に増加、大正15年（1926）の「静岡新報」には別荘用地の価格高騰が報道されている。

日露戦争の従軍カメラマンとして在日していたイギリス人、ハーバード・ジョージ・ポンティングは静浦を「三保松原より美しい」とし、同地の旅館「保養館」を「最高の日本旅館のひとつ」と評している。また、大山巖との縁で、年末を沼津で過ごすようになっていたフランス人、ポール・ジャクレーは、やがて内浦で休暇を過ごすようになり、松原と富士山をバックに立つ二人の漁師の肖像を版画に残している。

御用邸の建設に始まる別荘地建設が沼津にもたらしたものは、公衆衛生思想の普及とインフラの整備、そして近代海浜リゾート地としての名であった。

イ 現在の状況

昭和に入ると、海浜リゾート地の利用に変化が現れる。療養目的で長期間滞在し、海水浴を楽しむというスタイルから、日帰りや1泊でレクリエーションとして楽しむという要素が強くなり、都市近郊にも多くの海水浴場が作られるようになった。海水浴が上流階級の海浜療養から大衆レクリエーションへと変貌した結果である。

また、第二次世界大戦末期の沼津空襲では、御用邸の本邸が焼失し、昭和44年（1969）宮内庁は「近年、海水が汚染し、周辺の環境が悪化してきているので、御用邸として不適当になっていきているため」として沼津御用邸を廃止した。求心力を失った桃郷地区は、周辺の宿泊施設や別荘も次々と取り壊され、現在古い建造物が残るのは旧沼津御用邸（沼津御用邸公園）、学習院沼津遊泳場、旧三輪善兵衛別荘（沼津俱楽部）、安田屋旅館など数件となり、周辺は住宅地や商店へと変貌、かつての海浜リゾート地の面影を見つけることは難しい。

（2）熱海

ア 湯治場としての歴史

熱海市は、伊豆半島の東岸に位置し、東を相模湾、北を千歳川を境として神奈川県と接する県境の市である。箱根山麓から続く急峻な地形は海岸まで繋がり、市域のほとんどが斜地となる。海岸沿いには国道135号線が伊豆半島を南下する。

熱海には古くから小田原、三島、箱根を結ぶ交通路が存在し、この交通路を使用して、鎌倉時代には熱海の伊豆權現（伊豆山神社）から日金山を経由して、箱

根の箱根権現（箱根神社）を参詣する二所詣（後に伊豆国一宮である三嶋大社がこれに加わる）が鎌倉将軍によって行われていた。

そして江戸時代になると、小田原城下を経て熱海・三島を結ぶ街道は根府川街道として、熱海から上多賀、下多賀、網代を経由、伊東を通って下田に通じる道は東浦路として利用された。また、根府川街道と背通路（至箱根）の分岐点でもある日金山・東光寺は、觀音信仰の地であると同時に、近世・近代において富士山、伊豆七島等の展望地点として数々の絵画に描かれ、街道沿いの富士山展望地点として認知されていく。

一方熱海温泉の歴史は、伝承では天平勝宝元年には発見されていたとされ、中世においてはすでに湯治場として知られていたが、発展は近世以降となる。家康の2回の湯治、家光の御殿の築造、その後の御湯行の始まりが契機となり、幕府の直轄地であったこと

も幸いして、大名の本陣逗留等のために湯治場としての機能が整えられていった。元禄8年（1695）「豆州熱海湯治道知辺」（図4）、宝曆8年（1758）「熱海之絵図」には大湯を中心とした湯戸、住居、畠地といった土地利用の状況とともに、御殿や伊豆山権現、来宮神社、温泉寺が描かれている。これら、多くの絵図や紀行文の存在から、江戸時代中期から湯治場として広く知られるとともに、信仰の場も備えた複合レクリエーション地であった事がわかる。現在でも「豆州熱海湯治道知辺」「熱海之絵図」に描かれた地割の一部を市街地に見ることができる。

「景勝地・名所」としての熱海は、二代目歌川豊国作「名勝八景 热海夕照 热海ノ濱より大嶋之真景（天保年間）」に見ることができる。豊国が描いた八景は熱海の他に大山夜雨・江ノ島晴・金沢帰帆・鎌倉晩鐘・三保落雁・富士暮雪・玉川秋月で、熱海夕照は、噴煙を

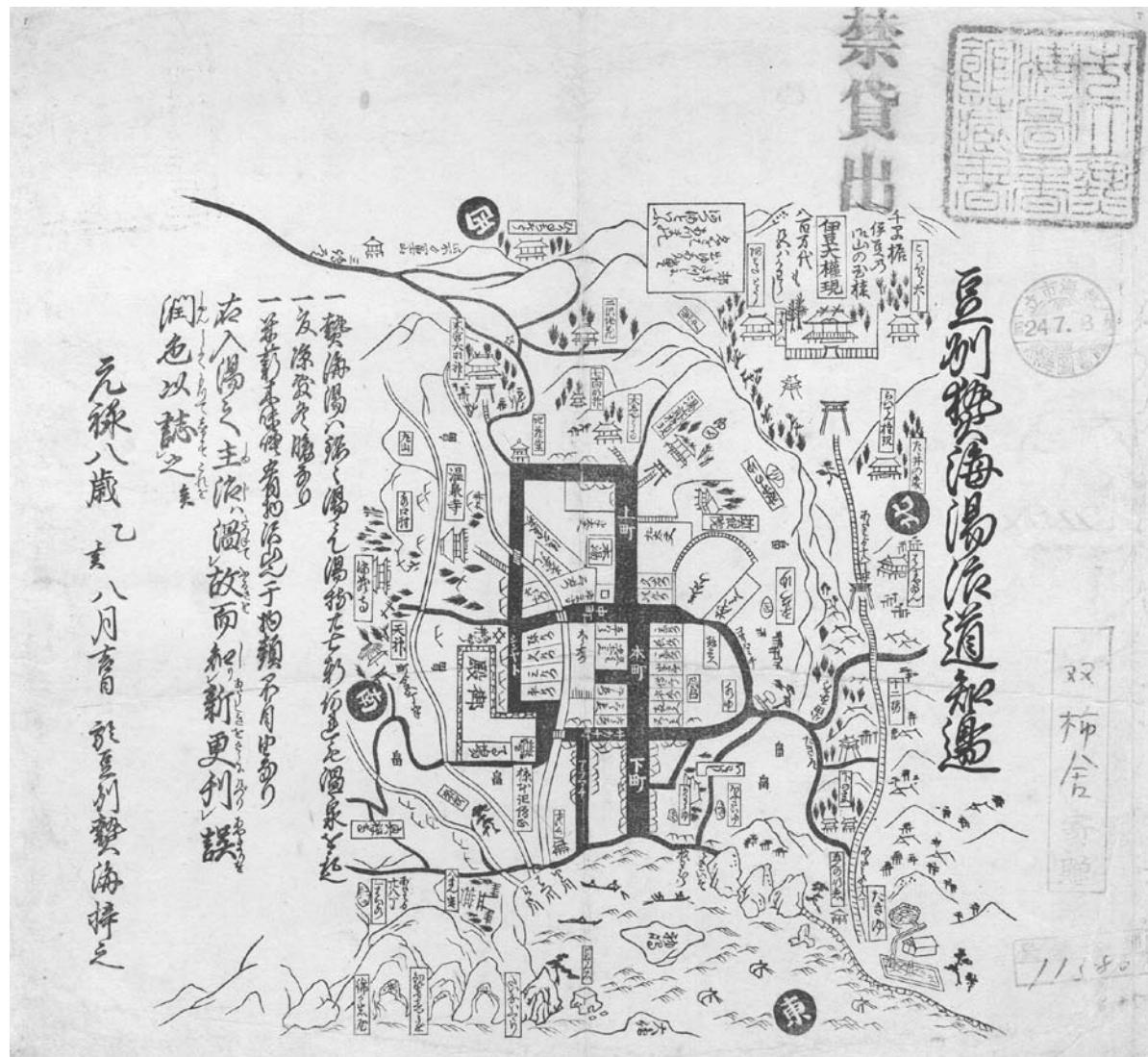


図4 豆州熱海湯治道知辺（熱海市立図書館提供）



図5 热海主要施設とその変遷（地理院地図使用）

上げる大島と沖合の初島を、熱海の集落の屋根越しに停泊する帆掛舟とともに描いている。静岡県を題材とする名所絵は富士山をバックに配置するのが常であるが、熱海からのランドマークは噴煙を上げる大島であった。

イ 保養地として

明治21年（1888）、岩崎彌太郎が所有していた将軍家御殿の跡地に「熱海御用邸」が建設される。これは沼津と同様に皇太子（のちの大正天皇）療養のために、一連の国内療養地探査の一環として選地・建設されたものである。これに先駆けて明治18年（1885）、大湯に近接して「喰瀬館（きゅうしきかん）」が造られた（註

No.	施設名	種別	設置	備考
1	熱海御用邸	別荘	明治21	消滅
2	梅園	療養施設	明治19	熱海梅園
3	ナツメヤシ	記念樹	明治4	県指定
4	きゅう氣館	療養施設	明治18	消滅
5	旧内田信也別荘・旧根津嘉一郎別荘	別荘	大正8 (1919)・昭和2 (1927)頃	登録、起雲閣
6	旧坪内逍遙別邸双柿舎主屋・離れ家	別荘	大正9 (1920)・昭和9(1934)	早稲田大学研究施設、坪内逍遙設計・佐藤武夫協力
7	旧藤原銀次郎別邸	別荘	大正15 (1926)	三井物産滌春亭、山田伊作設計、岡田永斎作庭
8	岩崎小彌太別邸	別荘	昭和1 (1935)	三菱熱海陽和洞
9	日向利兵衛別邸	別荘	昭和1 (1936)	重文、旧日向別邸
10	野村徳七別邸	別荘	昭和1 (1937)	野村証券塵外荘
11	中山悦治別邸	別荘	昭和15 (1940)	旅館大観荘
12	伏見宮別邸	別荘	昭和初	ホテルパイプの煙
13	石井健吾別邸	別荘	昭和8年～	登録、東山荘
14	旧岸信介別邸	別荘	昭和	二トリ保養所「銀山」吉田五十八設計
15	佐々木信綱別荘	別荘	昭和19 (1944)	凌寒荘 热海市有施設
16	岩波茂雄別邸	別荘	昭和16 (1941)	吉田五十八設計

- 豆州熱海湯治道知辺 (1695) の湯治場範囲
- ▲ 明治時代の療養施設・別荘等
- 大正時代の別荘
- △ 昭和 (戦前) の別荘
- 現在の別荘地

8)。喰瀬館は国内初の温泉療養施設で、内務省の衛生局長であった長与専斎の建議で建設され、ドイツの吸込器が設置、当時としては最新式の医療施設であるとともに、療養に適度な運動を取り入れることを目的とした梅園（現在の熱海梅園）も隣接して建設され、近代複合療養施設となった。熱海には御用邸が建設される以前より、財・政界人が滞在する高級旅館（近世においては陣屋）が存在しており、これらが「熱海富士屋会談」「熱海古屋会談」と呼ばれるような政治の舞台を提供していたが、喰瀬館・御用邸建設以降、温泉効能等の科学的分析結果を背景とした保養・療養地思想の広がりから、個人の別荘・別邸の建築が相次ぐ

こととなる。

インフラの整備も急ピッチで進んでいく。明治13年(1880)小田原-熱海間の熱海新道仮開業、明治28年(1895)に小田原-熱海間に人車鉄道が、明治40年(1907)に軽便鉄道が開通する。そして、明治22年(1885)、国内初の市外電話が熱海-東京間に開通した。明治41年(1908)8月に改正発行された「新撰豆州熱海温泉全図」には軽便鉄道の停車駅とともに、「小田原熱海間二時間半」との記載が見られ、三島からの陸路(旧根府川街道)の案内、市街地には「フジヤ」「古屋」などの老古旅館の名前が見られる。そして明治中期以降、尾崎紅葉の「金色夜叉」、高山樗牛の「わが袖の記」などの文学作品によって熱海の名は全国的に注目を浴びていく。

ウ 保養地から観光地へ

大正14年(1925)国鉄熱海線による熱海-国府津開通、昭和9年(1934)の丹那トンネル開通に伴う東海道線の開通によって、熱海への一般観光客来訪は急増し、宿泊者数は昭和4年(1929)1月の4万4千人が、昭和12年(1937)には16万3千人と爆発的に増加する。利用方法も、長期滞在型の湯治から団体客中心の宴会・短期滞在型へ変化し、大湯の枯渇、関東大震災、北伊豆大地震等の自然災害の影響による中心地施設の損壊・再開発や周年誘客の為の娯楽施設の建築とあいまって、熱海は保養地としての湯治場から温泉レジャー地へと変貌していった。

こうして大湯を中心とした伝統的な温泉保養地としての姿は失われたが、別荘地帯は徐々に伊豆七島を見渡す市街地外縁部の高台に移動している。これは、すでに大正時代から始まっている現象で、大衆化とともに猥雑化する市街地を囲むように別荘地帯が外側に広がっていく状況がある。これは、熱海のすり鉢状の地形と東側を相模湾に面した地勢的特徴が造り出した現象で、熱海の特徴ともいえる。

バブルの崩壊以降、国民ニーズの多様化に伴い中心部の大型ホテルの閉店が相次ぎ、熱海市は観光戦略の変換に迫られている。幸いにして戦前の別荘の一部が市域に残り、旅館や観光施設、企業の保養所として現在も使用され続けている。温泉資産とともに、これらの文化的資産活用の挑戦が続けられている。

(3) 御殿場

ア 景勝地としての歴史

御殿場市は静岡県の北東部にあり、標高は250-700m

と冷涼な気候である。富士山と箱根山に西東を挟まれた地形で、富士山の噴火活動の影響を受けてきた歴史を持ち、地表下は富士山の噴出物に厚く覆われている。

律令期以降、御殿場は甲斐と駿河、相模を結ぶ交通の要衝となり、官道として整備された足柄路(古代東海道)には柏原・永倉・横走の三つの駅が置かれた。そして、御殿場地域(足柄峠)は、相模国との境、富士見の「景勝地・名所」として古代~近代に至るまで、数々の文学作品が生まれている。古くは『古事記』、『万葉集』であり、富士山が描かれる最初の例は『更科日記』である。これらの作品によって、国の境、別離の場、富士見の峠としてイメージが定着する。足柄路は、慶長6年(1601)に東海道伝馬制度が設置されたのちも、「矢倉沢往還」として引き続き関東と駿河を結ぶ(註9)。

明治に入り富士登山の御師制度が廃止され、それまで須走村が独占していた東側からの登山口が、新たに富士山東表口として御殿場側に開設される。明治22年(1889)、酒匂川に沿って県境を越える東海道線が開通すると、御殿場駅を経由した富士登山は、東京方面からのアクセスの良さによって多くの登山者に利用されることになった。御殿場からの富士山の眺めは、若山牧水や北原白秋らによって随筆や歌としても残されている。

イ 保養地としての歴史

東海道線の開通と、明治32年(1899)の条約改正(註10)による内地雑居開始が契機となり、御殿場には多くの外国人、日本人別荘が立ち並ぶことになる。別荘は市域平坦地に展開したが、以下に「アメリカ村」「対山荘」「東山」「便船塚」「地蔵堂」に区分して各地区を概観する(図6)。

【アメリカ村】

外国人による避暑療養目的の別荘コミュニティ。英国人植物商バンディングが夏季療養のために訪れたのが契機となって、明治32年(1899)数名の外国人が別荘を建築、アメリカ村と呼ばれるようになる。アメリカ村は、大正7年に周辺住民との軋轢から隣地へ移転し、米国宣教師ジョージ・ワシントン・ボールデンの管理の下、一時期は30戸以上もの外国人別荘が立ち並んだ。

これらの別荘には礼拝堂、クラブハウス、プールなどが整備され、一定地区内に、日本人と雑居することなく信仰に基づく外国人専用の別荘コミュニティが出来上がっていた。その後、第2次世界大戦直前、外

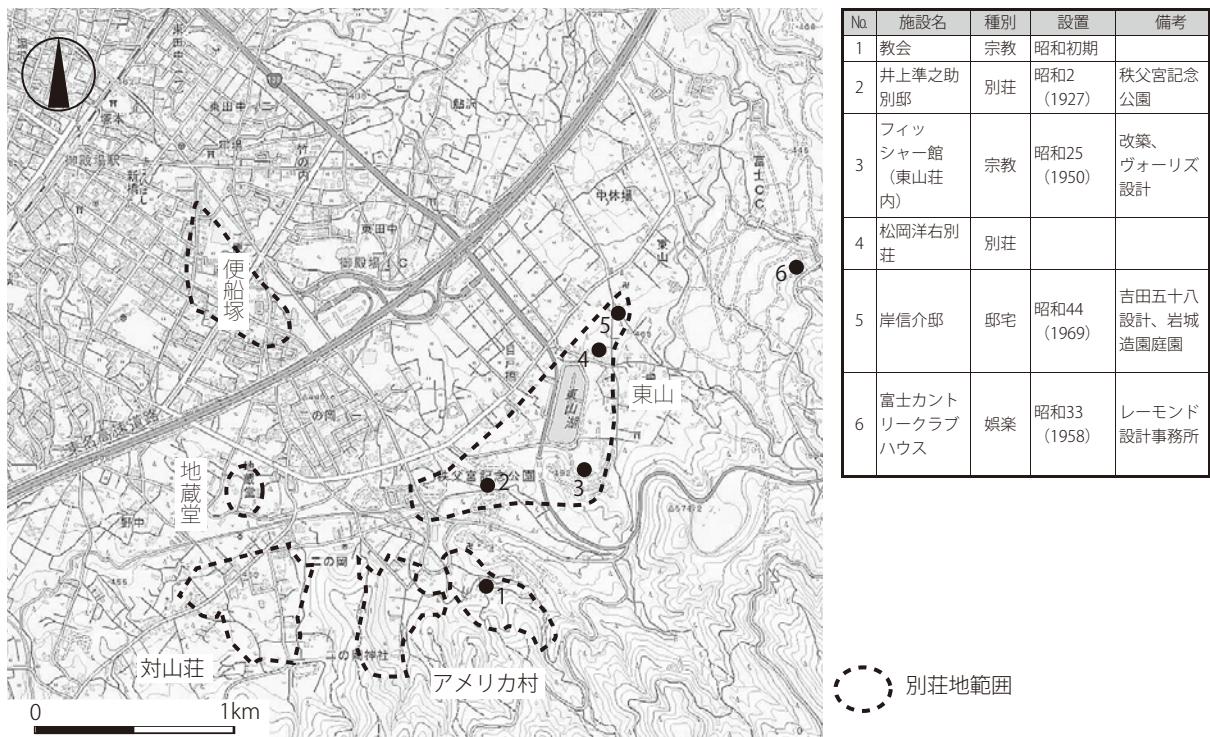


図6 御殿場別荘地分布（地理院地図使用）

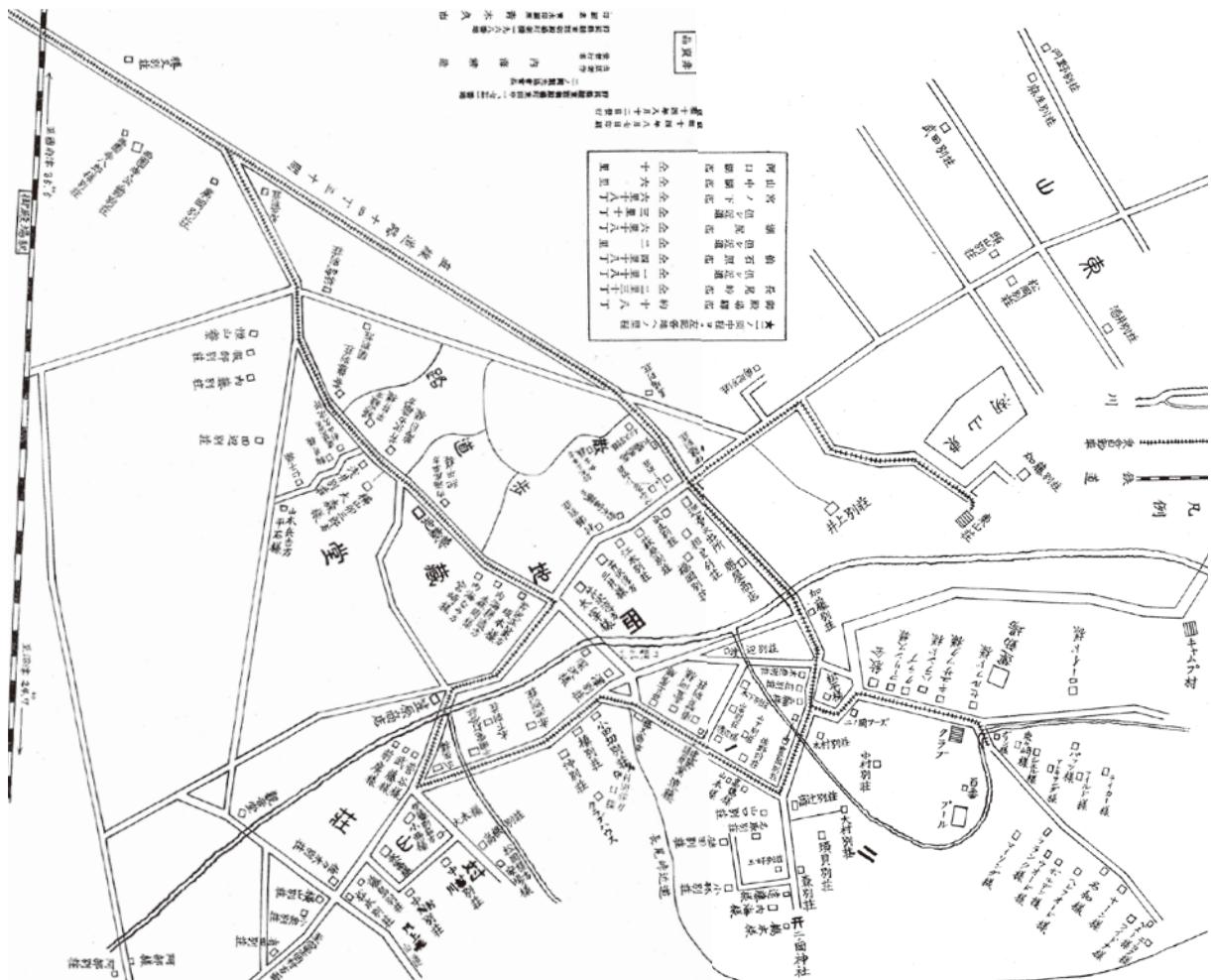


図7 御殿場町ニノ岡及其附近別荘略図（御殿場市史第7巻附図抜粋）

国人居住が困難となり、土地と建物は日本のキリスト教系学校等に移譲された。

【対山荘】

日本人の別荘地で、アメリカ村の西側にあたる。大正8年（1919）に満鉄や日本郵船などの顧問をしていた法学者の高根義人が「株式会社対山荘」を作り、「小軽井沢」として上流階級を対象に分譲を開始したのが始まりである。高根は水利権も獲得し、水道、電灯を建設、各宅地を自動車道に面するように配置した。昭和14年（1939）発行『御殿場二ノ岡及其附近別荘略図』には、松本蒸治（法学者、満鉄副総裁）、小泉信三（慶應義塾塾長）らの別荘位置が記載されている。現在でも別荘地の地割は残っており、企業の保養所として利用されているものもある。

【東山】

東山湖（人造湖）の周辺には山崎亀太郎（政治家 山崎鉄二の父）の誘致によって、明治末から戦後にかけて井上哲次郎（東京帝国大学教授、哲学者）、加藤玄智（陸軍士官学校教授、神道学）、松岡洋右（満鉄総裁、外務大臣）等が別荘を建築、昭和2年（1927）には井上準之助（大蔵相）が別荘を構え、後に秩父宮避暑療養のための別邸となる。東名高速道路開通後の昭和44年（1969）には、岸信介が自宅を建設し、晩年の17年間を東山で過ごしている。

また、東山湖の湖畔には、大正4年（1915）、YMCAの夏季学校「東山荘」が建てられた。東山の別荘はそのほとんどが湖から少々離れた森林の中に点在しているが、唯一YMCA東山荘は、周辺が開けた湖畔に面した施設である。この広い敷地を使い、その後施設は徐々に拡張され、建造物は建て替えられているものの宿泊研修施設として現在でも活動をしている。昭和25年（1950）に建てられたフィッシャー館は、改築されているが、ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築と言われている。

【便船塚】

大正末より日本人の別荘が建築される。比較的平坦な土地で御殿場駅に近く、西園寺公望、廣岡恵三の別荘があったことがわかっている。西園寺公望は、一年の大半を興津の坐漁荘に暮らしていたが、夏季には御殿場別荘を訪れていたようで、政府要人の訪問も少なくなかったという。この西園寺邸は一部瓦葺の茅葺田舎家で、地元の古民家を移築したものであった。便船塚周辺は、現在市街地となり、当時の面影は無い。

【地蔵堂】

詳細は不明であるが、『御殿場二ノ岡及其附近別荘略図』からは、昭和初期には三井家別荘等があったことがわかっている。

ウ 御殿場の特徴と現在の状況

御殿場の別荘地の特徴は、外国人が避暑療養を目的とした別荘を建築し、それが別荘地としての先駆けとなったことである。この別荘は、富士山を眺望する高原で夏季の数か月を過ごす目的であったが、キリスト教を基軸としたコミュニティが作られ、クラブハウスやテニスコート、プールといった施設と一体化した別荘地が作り上げられていった。また、彼らは富士山や湖を望む開けた空間を好む傾向にあり、これは野尻湖の国際村と類似するという指摘もある（註11）。

日本人の別荘開発は、少し遅れて大正時代～昭和初期を中心に始まり、戦後まで続く。富士山を、木立ち越しに望む森林内部を別荘地とするの方は、外国人別荘とは大きな違いがある。日本人の別荘は、昭和に入つてから建設されたものが多く、茅葺の民家を移築するケースがある。土屋和男氏はこの茅葺民家「田舎家」について、「近代数寄者たちがなじみを求めて到達した建築の一つの姿、それが田舎家」であると言っている。かつては西園寺公望邸、樺山資紀邸、太田信義邸などに古民家が移築され別荘として使用されていたが、現在は旧井上邸（秩父宮記念公園）が残る。

丹那トンネル開通とともに、東海道線は小田原－熱海－三島を経由して沼津へ至る海ルートとなる。加えて戦中の鉄材供出によって御殿場線が単線化し、御殿場の首都圏のバックヤードとしての役割も薄らいだ。御殿場に信州の高原リゾートのような発展がみられなかったのは、これら交通事情の問題とともに、大手資本による大規模な分譲がなされなかつたという理由もある。一方で、東名高速道路の開通もあり、戦後になって東山に富士カントリークラブ（赤星四郎コース設計、レーモンド事務所クラブハウス設計）が造られ、保養地がゴルフなどのかつての欧州貴族スポーツと一体化していく過程を見ることもできる。

5 まとめ

明治維新以降、転地・療養思想の広がりとともに、静岡県内には東京に在住する政治家、財界人、外国人などが次々と別荘を建築していった。御用邸を中心とした避寒・海浜保養地沼津、伝統的湯治場から御用邸を擁する避寒・温泉保養地として発展していった熱海、

外国人によって再発見された避暑・高原保養地御殿場などがこの代表で、近接しながらも性格の異なる三箇所の保養地（リゾート）が静岡県東部には成立したことになり、当時国内に設置された保養地のバリエーションを網羅する。

これらの共通点は、①伝統的景勝地・名所であること ②近代転地・療養思想に基づき設置されたものであること ③交通網の整備により近代に入って発展したこと ④皇室関係の別邸があり、それがリゾート地としての地位を高めたこと ⑤外的（外国人、政界・経済界の有力者）要求によって成立したことの5点である。三箇所の保養地は、有力者、著名人の別邸が建設されることで、時には政治や経済交渉の舞台となるとともに、マスメディアによって「日本の代表的リゾート地」として情報発信されていった。

別荘地が地元へもたらしたものは、公共インフラの整備、公衆衛生思想の普及、御殿場におけるキリスト教の布教や養豚・ソーセージ作りのような西洋的な生活習慣でもあった。地方の文明開化の嚆矢となったのである。

現在、これらの地域には、数は少ないが当時の状況を推察することができる別荘や、インフラ設備が存在し、稼働しているものも少なくない。三箇所の代表的な保養地の他にも、静岡県東部地区には楽寿園（三島：旧小松宮別邸）、三養荘（伊豆長岡：旧岩崎久彌別邸）、川奈ホテル（河津町）など、一連の保養地展開と、次の段階として鉄道資本によるリゾート開発の歴史の中で語ることのできる文化財も数々ある。

これらの建造物、遺構群は、個々の文化財として見ると同時に、近代保養地という視点で周辺の景観や付帯する庭園・施設とともに評価することによって、日本の近代化遺産としても考えることができる。

明治前半に突如として出現した静岡県東部の大規模な別荘地は、以上のようにリゾートの形成史を考える上で重要な視点を提示している。今後、残された遺構やリゾート関連施設の変遷を追う事で、東京近郊という地理的条件に恵まれた静岡県東部に残された、近代建築等の、近代保養地としての役割を、明確に整理することができると考える。

最後に、本稿を執筆するにあたり、栗木崇氏、勝俣竜哉氏には多くの助言をいただいた。記してお礼とする。

註

- 1 名勝：文化財保護法、文化財保護条例等で指定された土地、名所：景色または古跡として名高い場所、景勝地：景色のすぐれている場所、リゾート：避暑地、避寒地、保養地として長期間滞在することに適した場所、保養地：心身を休ませて健康を保ち活力を養う場所、観光地：多くの観光客が一時的に訪れる場所、別荘：本邸に対しての別宅
- 2 静岡県教育委員会 2015
- 3 清見寺付近を指すという解釈もある
- 4 富士山周辺を舞台とした「曾我物語」、沼津千本松原を舞台とした「伊賀越道中双六」等
- 5 福士雄也 2013 による
- 6 十和田朗 1994 など
- 7 『東闕紀行』「～千本の松原といふ所あり。海の渚遠からず、松遙かに生ひわたりて、緑の影際もなし」
- 8 岩倉具視静養のため建築を計画
- 9 現在の国道246号線
- 10 江戸時代末期の安政年間から明治初年にかけて、日本と欧米諸国との間で結ばれた不平等条約の改正を示す。これによって外国人に日本国内での居住権・営業権を与えられ、内地居住外国人は日本裁判所の管轄に属することとなった。
- 11 勝又宏幸ほか 1990

引用・参考文献

- 沼津市教育委員会編 2016 『旧沼津御用邸調査報告書』
静岡県教育委員会編 2015 『静岡県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』
福士雄也 2013 「【解説】富士画1000年史」『芸術新潮9月号』
土屋和男 2013 「近代和風別荘建築について」
水沼淑子ほか 2000 「近代における皇族別荘の立地・沿革及び建築・使い方に関する研究」『住総研 研究年報No.27』
MOA美術館編 1997 『熱海再発見 図録』
御殿場市文化財審議会編 1996 『文化財のしおり第28集 御殿場の別荘』
十和田朗 1994 「関東圏における近代別荘地形成に関する史的研究」東京工業大学学位論文
勝又宏幸ほか 1990 「戦前の御殿場における高原リゾートの成立と展開」『第25回日本都市計画学会学術研究論文集』